

『紅樓夢』における蘅蕪苑の描寫について

——「蘭風蕙露」と「蘼蕪滿手泣斜暉」——

渋谷 井 君 也

はじめに

『紅樓夢』における薛寶釵に對する人物描寫は、もう一人のヒロインの林黛玉と同様に、從來高く評價されてきた。そうした人物形象を際立たせるために、暗喩的あるいは象徴的な表現が用いられていることも既に多くの指摘のあるところである。『紅樓夢』に見られる詩文は最もそういう特徴を有すると思われる。

『紅樓夢』の詩文はたいてい、先人の詩作から引用したものと、曹雪芹が自ら創作したものの二種に分けられる。しかも、周知のように、それらの詩文はほとんど「詩識」の性格を持っており、作品の内容や人物の結末などを暗示する役割がある。例えば、第十七・十八回では、薛寶釵の大觀園での住居である

「蘅蕪苑」に關しての描寫に「蘼蕪滿手泣斜暉／蘼蕪は手に滿ちて斜暉に泣く」という詩句が見られる。この詩句は食客の口を借りて語られたものである。一九八〇年代、この詩句が唐代の魚玄機の「閨怨」詩より出ることが發見された後、多くの研究者によつて様々な角度や側面から考察が重ねられ、特に薛寶釵が最後に「棄婦」となることの暗示であることが明らかにされた。これまでの先行研究で、主に薛寶釵の人物設定が注目されていた。しかし、文學史上で有名な女流詩人である魚玄機に對して、曹雪芹はどう見ていたのだろうか。作者はなぜ魚玄機のこの詩を選んだのだろうか。この詩句はいかにして作品中に取り込まれ、いかにして薛寶釵に結び付けられたのだろうか。このように、さらに考察すべき問題はまだまだあると思われる。

本論では『紅樓夢』のこうした暗喩的、象徴的表現に着目し、『蘅蕪苑』の描寫に引用された魚玄機詩を取り上げ、薛寶釵というヒロインの人物形象をいかに表現しているかについて検討し考察していきたい。また、食客に對する描寫にも注目したい。

一 「斜陽院」と「蘅蕪滿手泣斜暉」

まず、第十七・十八回において、賈家の娘で貴妃に出世した元春が里歸りするのを迎えるため、賈政と食客らが、『蘅蕪苑』で「扁額」と「對聯」を題する場面を見てみよう。

賈政歎道：「……此造已出意外，諸公必有佳作新題以顏其額，方不負此。」眾人笑道：「莫若『蘭風蕙露』貼切了。」賈政道：「……其聯云何？」一人道：「我倒想了一對，大家批削改正。」念道是：「麝蘭芳靄斜陽院，杜若香飄明月洲。」

眾人道：「妙則妙矣，只是『斜陽』二字不妥。」那人道：「古人詩云『蘅蕪滿手泣斜暉。』」眾人道：「頽喪，頽喪。」（傍線は筆者による。以下は同じ）

このくだりの描寫で注意すべきところは、『蘅蕪滿手泣斜暉』という詩文を引くことの意味である。一同が「蘭風蕙露」と

いう扁額を提案すると、一人の食客が、『麝蘭芳靄斜陽院／麝蘭芳は靄む斜陽の院』という對聯を言った。この食客は、また典故となる魚元機の詩句「蘅蕪滿手泣斜暉」も挙げた。そこで、なぜその食客が「蘅蕪滿手泣斜暉」を引いたのか、またこの詩を作った「古人」である魚元機が取り上げられることの意味について考えたい。その前に、まず版本の間の異同を説明しておきたい。

蘅蕪滿手泣斜暉（庚辰本、正文では「手」を作り、同時に傍らに「院」と書いてある）

蘅蕪滿手泣斜暉（己卯本、正文では「手」を作り、朱筆で消され、同時に傍らに朱筆で「院」と書いてある）

蘅蕪滿手泣斜暉（列藏本・蒙府本・夢稿本）

蘅蕪滿院泣斜暉（戚序本・甲辰本）

蘅蕪滿院泣斜陽（程甲本・程乙本）

以上からみて、「庚辰本」と「己卯本」は、正文では「手」に作るが、同時に傍らに「院」が書かれている。その他のテキストは、ほとんど「院」に作る。現在通行する排印版のテキストには、「手」に作るものもあれば、「院」に作るものもある。この句は、唐代の魚玄機の「閨怨」に據る。

「閨怨」 魚玄機

蘼蕪盈手泣斜暉。聞道臨家夫婿歸。別日南鴻纔北去。今朝北雁又南飛。春來秋去相思在。秋去春來信息稀。局閉朱門人不到。砧聲何事透羅幃。

以上から窺えるのは、魚玄機の「閨怨」では、「蘼蕪盈手泣斜暉」に作るということである。「盈」は「満」と意味が近いので、もとの詩によつて「手」とすべきである。「庚辰本」と「己卯本」が「手」を「院」に変えるのは、恐らくその食客の作る「蔚蘭芳靄斜陽院」の「斜陽院」に影響されたのであろう。しかもここで描くのは「蘼蕪苑」で、「苑」と「院」は同音であり、したがつて、「手」を「院」に変えたのであろう。「程甲本」と「程乙本」は、前文の「斜陽」との一致を追求し、「斜暉」も「斜陽」に変えたのである。

魚玄機のこの「閨怨」詩は、内容から見れば「棄婦」詩である。「蘼蕪盈手」とは、「棄婦」が「蘼蕪」を採ることを表す。多くの學者に指摘されるように、「蘼蕪」は、古代詩文において「棄婦」に關係づけられがちである。しかも「蘼蕪」を通して、もう一つの有名な「上山採蘼蕪²」という詩作にさかのぼることができる。「上山採蘼蕪」も「棄婦」詩であり、詩中に描かれているのは、山へ「蘼蕪」を採りに行つた婦人が歸りの道で「故夫」に會つた時の會話である。岳中峰によ

『紅樓夢』における蘼蕪苑の描寫について（渋井）

れば、早くに「齊・梁の時代、一部の詩作には、すでにこの詩を典故としたものがあり³」、例えば、謝朓の「同王主簿怨情」の「相逢詠蘼蕪、辭寵悲團扇⁴」、王筠の「和吳主簿遊望」の「寧復歌蘼蕪、惟聞嘆楊柳⁵」などが挙げられている。そのほか、多くの學者が指摘するように、第三十八回の薛寶釵の「憶菊」も、「閨怨」の影響を受けて作られたものである。

「憶菊」 蘼蕪君（薛寶釵）

悵望西風抱悶思，
蓼紅葦白斷腸時。
空籬舊圃秋無跡，
冷月清霜夢有知。
念念心隨歸雁遠，
寥寥坐聽晚砧遲。
誰憐我爲黃花瘦，
慰語重陽會有期。（第三十八回）

白艷玲は、薛寶釵のこの「憶菊」について、「魚玄機の「閨怨」と、詩境や心境がまったく同じである。……このことから、《憶菊》が魚玄機の《閨怨》の趣意を焼きなしたものであると推察できるだろう⁶」と指摘した。魚玄機の「閨怨」の「別日南鴻纔北去 今朝北雁又南飛」には、「南鴻」と「北雁」がある。薛寶釵の「憶菊」の「念念心隨歸雁遠」にも「歸雁」がある。第七十回には、風を上げる描寫があり、薛寶釵があげた風は、「七羽の大雁を連ねたもの」である。

這裏小丫頭們聽見放風箏，
巴不得一聲兒，
七手八腳，

都忙著拿出來個美人風箏來，……寶釵也高興，也取了一個來，却是一連七個大雁的，都放了起來。（第七十回）

朱淡文は、「大雁は、古代の詩詞において愛するものと離れるため、苦しきことを表す。寶釵の〈憶菊〉はまさに、……後に出家した賈寶玉に對しての思念を象徵するものである」と指摘した。

以上の種々の現象および先行研究から、曹雪芹が「蘅蕪苑」でこの一句を引用する目的は、薛寶釵が最後に見捨てられ、「棄婦」になる結末を暗示することにあるということである。しかし、まだ未解決の問題が残されている。中國の歷史上で、このような「閨怨」の類の「棄婦」詩は數多くある。曹雪芹は、なぜ魚玄機のこの詩を選んだのだろうか。それに關して、作者である魚玄機自身について手がかりを求めてみたい。

二 「蘭風蕪露」と魚玄機の字「蕪蘭」

まず、食客たちが、最初にあげた「蘭風蕪露」であるが、これまでの先行研究において、その出處は明確に指摘されていない。しかし實は、元の宋褰の「遺芳蔓」詩には以下のような詩句が見られる。

「遺芳蔓」 武帝思念李夫人，臥延涼殿。夢夫人遺帝蘅蕪

之香，覺而衣枕香三月不歇，帝因製曲名「遺芳蔓」，又賦「落葉哀蟬曲」。

龜屏象簾塵凝輝，桂枝落盡秋氣淒。瓊瑤臺上魂是非，孤鸞照影心含悲。離宮別館春茫茫，延涼殿上空情傷。却憑鍾火一莖草，換得蘅蕪三月香。蘭風蕪露怨嬌，落葉哀蟬■鳴嘶。嚶嚶嚶語誰得知？在取玉簪搔素絲。（■は欠字である）

「遺芳蔓」の「蘭風蕪露怨嬌■」一句には、「蘭風蕪露」とあり、「換得蘅蕪三月香」一句には「蘅蕪」とある。同時にこの詩は、李夫人が夢で漢武帝に蘅蕪香を送るという典故を背景にして作られたものである。しかし、李夫人の典故が、食客たちの連想の中で、どうして魚元機の方へ向けられていくのだろうか。

魚玄機は、唐の女道士であり、薛濤と李冶と並んで唐代の最も有名な女流詩人の一人である。その事績は新・舊兩唐書には見られないが、唐の皇甫枚の『三水小牘』と五代の孫光憲の『北夢瑣言』卷九に簡潔な記載がある。

西京咸宜觀女道士魚玄機，字幼微，……色既傾國，思乃入神。喜讀詩文，尤致意於一吟一詠。……咸通初，遂

從冠于咸宜。而風月賞玩之佳句，往往播於士林。然蕪

蘭弱質，帔不能自持，復爲豪俠所調，乃從游處焉。於是風流之士爭修飾以求狎，（後略）。『三水小牘』⁹

唐女道魚玄機字蕙蘭，甚有才思。咸通中，爲李億補闕執箕帚，後愛衰下山，隸咸宜觀爲女道士。有怨李公詩曰：「易求無價寶，難得有心郎。」又云：「蕙蘭銷歇歸春浦，楊柳東西伴客舟。」自是縱懷，乃娼婦也。竟以殺侍婢爲京兆尹溫璋殺之。有集行於世。『北夢瑣言』¹⁰

以上の二則の記事から、魚玄機に關する大體の事情を知ることが出来るだろう。彼女は作詩の才覺があり、後に道觀に入り女道士となつた。最後は侍女を殺したため死刑にされた。このほか、『唐才子傳』卷五にも彼女に關する記述がある。

玄機，長安人，女道士也。性聰慧，好讀書，猶工韻調，情致繁縟。咸通中及笄，爲李億補闕侍寵。夫人妬，不能容，億遣隸咸宜觀披載。有怨李詩云：「易求無價寶，難得有心郎。」與李郢端公同巷，居止接近，詩筒往返。復與溫庭筠交遊，有相寄篇什。……有詩集一卷，今傳。『唐才子傳』¹¹

以上に引いた記載の一つ一つを史實と照らし合わせるのは難しく、一部分はもはや考證不可能である。とはいえ、後世における魚玄機への評價や認識は、結局のところこれらの材

『紅樓夢』における蘅蕪苑の描寫について（渋井）

料によつて形成されたのである。

魚玄機が歴史において注目されるのは、彼女の詩作のためである。例えば、「贈隣女（一作寄李億員外）」には、「易求無價寶、難得有心郎」「自能窺宋玉、何必恨王昌」があり、それらの詩句からは、魚玄機が非常に率直で、好き嫌いがはっきりした人間であることが窺えるだろう。また、「聞李端公垂釣回寄贈」の「自慙不及鴛鴦侶」などからは、彼女が交際した男性は廣く、しかも交際した男性とは一般的な「男女關係」ではないようであるということがわかる。このような女性性は、八・九世紀の中國において、どのように評價されたのだろうか。『北夢瑣言』では、一方で彼女が「甚有才思」と言い、他方では「自是縱懷、乃娼婦也」と言う。これは彼女への最も代表的な評價と言えよう。

曹雪芹はなぜ、「娼婦」と呼ばれる魚玄機の詩作を引くのだろうか。食客たちは、「蘭風蕙露」を題し、うちの一人の食客が、魚玄機の詩句「蘼蕪滿手泣斜暉」を思いついた。この食客は「いかにして」魚玄機を思いついたのだろうか。『北夢瑣言』と『三水小牘』に盛られる次のような記述に注意すべきである。

唐女道魚玄機字蕙蘭，……云：「蕙蘭銷歇歸春浦，楊柳

東西伴客舟。』『北夢瑣言』

蕙蘭弱質，不能自持。『三水小牘』

食客たちの題した扁額「蘭風蕙露」には、「蘭」と「蕙」の字が含まれる。『北夢瑣言』では、魚玄機は字を「蕙蘭」と記載されており、引用される彼女の詩句「蕙蘭銷歇歸春浦」にも「蕙蘭」がある。しかも、『三水小牘』では、彼女を「蕙蘭弱質」と言う。「蘭風蕙露」の「蘭」「蕙」の二字と、『北夢瑣言』と『三水小牘』に現れる「蕙蘭」から、曹雪芹が「蕙蘭」を通して魚玄機と「蘭風蕙露」を結びつけたことが窺えるだろう。つまり、この食客は、魚玄機の字が「蕙蘭」であること、そして「蘭風蕙露」に「蘭」「蕙」の二字があることから、魚玄機の詩文を思いついたのだと考えられる。

また、この食客の描寫は魚玄機の「詩作」、および「本人」に對して、きわめて詳しい様子が見て取れる。この點は特に注意すべきである。上掲した「蕙蘭」のほか、「靡蕪滿手泣斜暉」という詩句を引用することからも明らかである。すでに言及した通り、魚玄機のこの「閨怨」詩は、典型的な「棄婦」詩であり、その内容も、薛寶釵という人物の設定にとつて非常に相應しい。しかしながら、その詩自體は決してさほどの傑作ではない。魚玄機自身の詩作の中でも目立つものではない。

い。魚玄機の詩作について極めて熟知していない限り、わざわざこの詩を取り上げることはないであろう。然るに、この食客は、口をついてこの詩を話し出すことができる。それは、まさに彼がこの詩を熟知していたことを示す。

三 「古人詩云」から見る食客に關する人物描寫

その食客の人物設定についてどう考えればよいのだろうか。作者がこのように設定したのは、どのような意圖に基づくものであろうか。それについては、魚玄機と交際した人たちの、彼女に對する態度から、ある程度の啓示は得られるだろう。『北夢瑣言』と『唐才子傳』の記載によれば、魚玄機が李億に嫁ぎ、後に見捨てられ、女道士になった。彼女の詩作に、「情書寄子安」と「春情寄子安」（李億の字は子安である）などがあり、それらは、彼女と李億の間の關係を書いたものである。そのほか、彼女の詩作から、李億以外の男性との交際も見え、その中で、最も有名なものは溫庭筠である。

「冬夜寄溫飛卿」の「疎散未閑終逐願」、或いは「寄飛卿」の「瑤琴寄恨生」「嵒君嬾書札、底物慰秋情」からは、二人の深い關係が窺えるだろう。同時に「この二首の詩は、溫庭筠への大きな不滿が窺える」⁽¹⁷⁾。先行研究では、溫庭筠のほか、李

近仁、李郢、劉渾（劉尚書）などとの交際がすでに指摘されているが、他の多くの人は考證不可能である。同時に發見できるのは、「今は、魚玄機のほうから、相手に贈った詩作しか残っておらず、男性側の詩集には、魚玄機の詩が残されていない^⑩」ことである。魚玄機の詩作から見れば、彼女と交際した人の中には、官僚もいれば、文人もいる。そのうち詩文が傳わってきた人もいる。このことから、彼らの詩集に「魚玄機」の字句がないのは、魚玄機に送る詩が書けなかった、あるいは書かなかつたためではあるまい。このことに關しては、梁超然は、「これらの男士たちは、おそらく封建の禮教に縛られ、敢えてこの類の愛情生活を公開しなかつた。また、魚玄機は犯罪で殺されたため、詩集を編集するとき、彼女に關した詩作を削除してしまつた可能性もある^⑪」と指摘した。

魚玄機と同時代の人は言うまでもなく、曹雪芹の描いたこの食客の、魚玄機に對する態度からもそれは窺える。彼が魚玄機の「蘼蕪滿手泣斜暉」を引くときは、「魚玄機の詩に云う」でなく、「古人の詩に云う」と言うのである。儒教は、「聖人」「祖先」「古人」などに對し、敬意を以つて對するものだが、魚玄機が古人の詩集にさえも出られない女性であるのに、彼女を「古人」と呼ぶのは、不自然であらう。この食客が魚玄

機を「古人」と呼ぶのは、彼個人として敬意を表すかもしれないが、それよりさらに重要なのは、魚玄機の詩作に非常に熟知しているという公開しづらいことを隠そうとしていたのではないだろうか。

食客たちは、「瀟湘館（林黛玉の大觀園での住居）」の「千百竿翠竹／無數の青竹（第十七・十八回）」を見、「淇水」と「睢園」の二つの「君子」「文人雅士」を讀める典故を頭に思い浮かべるが、「蘼蕪苑」で、魚玄機の詩文「蘼蕪滿手泣斜暉」を思いつく。表面的にみれば、兩者はまつたく關係がないようであるが、實際のところ、それは、主に「食客」という人物の精神性格の異なる側面を表すのではないだろうか。食客たちは、常に「君子美德」を讀めることを念頭に置く一方、魚玄機のような人の詩文にも非常に關心を持つてゐる。もし「釵釵對峙（釵釵は賈寶玉が林黛玉に送つたあざなである）」／釵・釵が對峙する（脂硯齋評、庚辰本第十七・十八回）「薛林並舉」の角度から見れば、作者は、彼らが魚玄機の詩文に對し、『四書』『五經』に劣らぬほどの關心を示していることを強調するだろう。ただし、それを隠さざるを得ない。

おわりに

「女性尊重」「女性への注目」は、賈家を中心とした貴族生活の描寫や寶・黛・釵の戀愛などと同様に、『紅樓夢』において、曹雪芹が最も描寫しようとするテーマの一つである。曹雪芹は、薛林二人をはじめ、金陵十二釵など一群の女性像を作り上げただけでなく、同時に、積極的に詩文や典故などの様々な表現手法を用いて歴史上の有名な女性、例えば、湘妃、李夫人、楊貴妃、西施などを作品に取り込ませ、女性に關する主題を完成させたのである。魚玄機もそのうちの一人である。

魚玄機は文學史における代表的な女流詩人であるのに、曹雪芹に注意されるのは極めて自然なことであろう。「蕪蕪苑」における魚玄機に關した描寫はどのような特徴があるだろうか。字面上だけでは、このくだりの描寫と、魚玄機との關係になかなか氣づきがないが、前述した「蘭風蕪露」の「蘭」「蕪」の二字と魚玄機の字の「蕪蘭」との關係、また食客「蘼蕪滿手泣斜暉」を示した食客が魚玄機の詩作およびその本人について熟知しているが如き描寫から、作者は魚玄機を意圖的に、意識的にこの場面に用いたのではないだろうか。ただ

し、その實名が巧みに隠されたのである。

『唐才子傳』などの記載によると、魚玄機は、夫の李億に捨てられて女道士となった。薛寶釵も、最後で賈寶玉の出家により、事實捨てられるに等しい。ある意味二人とも「棄婦」になるのである。それゆえ、曹雪芹は魚玄機の詩句を引き、薛寶釵が「棄婦」になることを暗示したのでろう。しかし、魚玄機は作品に取り込まれた女性として、薛寶釵は作者が創作した女性として、二人は關連性を持つ一方で、同時に獨立した人物として個別に考察する必要があると思われる。

魚玄機が文學史上で注目されるのは、彼女の「棄婦」としての側面よりも、むしろ『北夢瑣言』に記されたように、文才がありながら「娼婦」と呼ばれるという側面ゆえであろう。『紅樓夢』において、彼女の「娼婦」の側面も扱われたのだろうか。もちろん、魚玄機が背負わされた「棄婦」と「娼婦」の二つのイメージのうち、「棄婦」のほうは薛寶釵に關連しているが、「娼婦」としての側面は薛寶釵とまったく關係性が見られない。むしろここで注意すべきなのは、食客という人物の描寫と「娼婦」との關係性である。食客は魚玄機を「古人」と呼んでいる。魚玄機が「娼婦」と稱され、刑死した人にもかわらず、「古人」と呼ぶのは、儒教を道德基準の社會にお

いて、どうしても違和感がある。このことから、その食客が文才がありながら「娼婦」と稱される魚玄機に對する微妙で曖昧な心的態度は窺えるだろう。曹雪芹がこのように意圖的に食客に魚玄機を「古人」と呼ばせることで、食客の人物像を描寫しているということは、非常に興味深い。

「蘅蕪苑」が所在する大觀園は、賈寶玉の實の姉、王妃である賈元春の里歸りのために建てられた別墅である。『紅樓夢』における大觀園および「元妃の里歸り」に關する描寫は、賈家の正月、先祖の祭祀などともに、賈家が貴族階層としての「榮光」「體面」「富貴」「贅澤」を最も表現している場面である。しかるに、こうした「絢爛多彩」「富貴風流」を極め、「仁風徳雨（脂硯齋評、庚辰本第十三回）」、「堯街舜巷（同前）」と稱される描寫の裏には別の側面は見取れる。「蘅蕪苑」斜暉を作った魚玄機は、「娼婦」と呼ばれる一方で、その詩句が引かれるのは、薛寶釵が「棄婦」になる結末を暗示するためである。このように、魚玄機が刑死し、彼女が「娼婦」と稱されること、そして後に薛寶釵が「棄婦」の運命をたどることから、曹雪芹が十八世紀なしい歴史上の中國社會がどう女性を捉え、女性にどのような運命をもたらしたのかを窺えるのではないかと思う。

『紅樓夢』における蘅蕪苑の描寫について（波井）

使用版本等説明

本論において、引用した『紅樓夢』の作品の原文が、「版本」の異同等の説明が必要である場合を除き、使用したのは、次の排印版のテキストである。（清）曹雪芹（著）、馮其庸（重校評批）：『瓜飯樓重校評批紅樓夢（繁體字）』、遼寧人民出版社、二〇〇五年。

本論で言及した「版本」は、次のとおりである。『庚辰鈔本石頭記（庚辰本）』、廣文書局有限公司、一九七七年。『脂硯齋重評石頭記（己卯本）』、上海古籍出版社、一九八〇年。『戚蓼生序鈔本石頭記（戚序本）』、廣文書局有限公司、一九七七年。『蒙古王府本石頭記（蒙府本）』、書目文獻出版社、一九八八年。『甲辰本紅樓夢（甲辰本）』、書目文獻出版社、一九八九年。『乾隆鈔本百二十回紅樓夢稿（夢稿本）』、廣文書局有限公司、一九七七年。『程甲本紅樓夢（程甲本）』、書目文獻出版社、一九九二年。『程乙本新鐫全部繡像紅樓夢（程乙本）』、廣文書局有限公司、一九七七年。

脂硯齋の評語について、各版本を照らし合わせるほかに、文字の校訂と句讀點などは次の文獻を参照した。（清）脂硯齋等（評）：『紅樓夢評』、朱一玄（編）、『紅樓夢資料匯編』、中國古典小說名著資料叢刊、第七冊、七五—五二七頁、南開

大學出版社、二〇〇四年。

作品原文の日本語譯について、次の文獻を參考した。曹雪芹（作）、松枝茂夫（譯）：『紅樓夢』、岩波書店、昭和四八—五六年。曹雪芹（著）、伊藤漱平（譯）：『紅樓夢』、平凡社ライブラリー、一九九六—一九九七年。

注

(1) 『全唐詩』、卷八〇四、九〇四九頁、中華書局、一九六〇年。
この詩文が魚玄機の「閨怨」より出ることと比較的早く指摘するのは、謹聞氏の「關於〈蘼蕪滿手泣斜暉〉的出處」（『紅樓夢學刊』、一九八七年、第三輯）。

(2) 「上山採蘼蕪」詩の原文は、「上山採蘼蕪 下山遇故夫 長跪問故夫 新人復何如 新人雖言好 未若故人姝 顏色類相似 手爪不相如 新人從門入 故人從閤去 新人工織纈 故人工織素 織纈日一匹 織素五丈餘 將纈來比素 新人不如故（陳）徐陵（編）、（清）吳兆宜（注）・程琰（刪補）、穆克宏（點校）：『玉臺新詠箋注』、一一二頁、中華書局、一九八五年。」である。魚玄機の「閨怨」の蘼蕪が「上山採蘼蕪 及び棄婦と關係することについては、例えば辛島驍の『魚玄機・薛濤』（集英社、一九六四年）など魚玄機研究においてはすでに指摘されている。『紅樓夢』研究において、朱淡文の『薛寶釵形象探源』（注釋（8）を参照）、白艷玲の『試析〈蘼蕪君〉的文化

意蘊」（注釋（7）を参照）などの論文に言及されている。朱淡文はまた、趙嘏の「蘼蕪葉復齊」の「提筐紅葉下、度日采蘼蕪。掬翠香盈袖、看花憶故夫」を挙げる。

(3) 岳中峰：「上山採蘼蕪」の時代及其他——兼與黃典誠教授商榷、『閱讀與寫作』、一九九七年、第九期。

(4) (5) (陳) 徐陵（編）、（清）吳兆宜（注）・程琰（刪補）、穆克宏（點校）：『玉臺新詠箋注』、一六一頁、三二九頁、中華書局、一九八五年。

(6) 白艷玲：『試析〈蘼蕪君〉的文化意蘊』、『語文學刊』、二〇〇四年、第三期。このほか、朱淡文の「薛寶釵形象探源」（注釋（8）を参照）においても言及している。

(7) 朱淡文：『薛寶釵形象探源』、『紅樓夢學刊』、一九九七年、第三輯、六頁。このほか、張玉璋の「寶釵放（二連七個大雁）風箏的寓意簡析」（『紅樓夢學刊』、一九九七年、第四輯）において、この回の「雁」の風の意義について言及している。

(8) (元) 宋娶：『燕石集』、（清）顧嗣立（編）、『元詩選（二集）』、五〇五頁、中華書局、一九八七年。

(9) (唐) 皇甫枚（撰）：『三水小牘』、『叢書集成初編』、第二七〇四冊、中華書局、一九八三年。

(10) (宋) 孫光憲（撰）：『北夢瑣言』、七六頁、中華書局、一九六〇年。

(11) (元) 辛文房（撰）、周本淳（校正）：『唐才子傳校正』、二四〇—四一頁、江蘇古籍出版社、一九八七年。

(12) (13) (15) (16) 『全唐詩』、卷八〇四、九〇四七頁、九〇九五

頁、九〇四九頁、九〇五三頁、中華書局、一九六〇年。

- (14) 魚玄機のあざなについて、二説がある。一つは「幼微」で、もう一つは「蕙蘭」である。辛島驍は、「魚玄機と」同時の皇甫枚の『三水小牘』では、幼微。宋初の孫光憲の『北夢瑣言』では、蕙蘭。南宋の計有功の『唐詩記事』、元の辛文房の『唐才子傳』以下明の諸書は、すべて幼微のほうをとり、現代の『中國人名辭典』になつて、兩者をまとめて、（あざなは幼微、一字蕙蘭）としている」とまとめている（辛島驍：『魚玄機・薛濤』、一六頁、漢詩大系、第一五卷、集英社、一九六四年）。
- (17) (18) (19) (20) 梁超然：「魚玄機略考」、『西北大學學報（哲學社會科學版）』、一九九七年、第三期、第二七卷。魚玄機に關する研究は、梁超然の「魚玄機略考」のほか、辛島驍の『魚玄機・薛濤』（集英社、一九六四年）などの著作も參考した。このほか、魚玄機に關する研究が多くあり、一一詳述しない。

- (21) 余英時：『紅樓夢的兩個世界』、九七頁、上海社會科學院出版社、二〇〇二年。

『紅樓夢』における蘅蕪苑の描寫について（渋井）